

# 『太平洋食堂』

作・嶽本あゆ美

明治末期に起きた大逆事件。爆裂弾による天皇暗殺を謀ったとして、幸徳秋水を筆頭に、二十六名の関係者に大逆罪で有罪が下された。今日では、平民社の管野スガ（戯曲中の人物名）神崎シゲ）らを中心とする若者四名による爆発物取締法違反に過ぎないという見方がされている。

この史上稀に見る、思想弾圧と冤罪によって十二名という大量の刑死者を出した大逆事件は、平民社の事件として語られる事が多い。その一犠牲者とされた和歌山県新宮の医師、大石誠之助（同）大星誠之助）と浄土真宗僧侶、高木顕明（同）高萩懸命）を主軸に、キリスト教の牧師であり大逆事件の生き残りである沖野岩三郎（同）沖田三郎）をナビゲーターとして、明治に生きたりベラリスト達の夢と挫折を、首都から遠く離れた熊野の地を舞台に描いた作品。

## 《梗概》

新宮の医師、大星誠之助は日露戦争開戦の年、「太平洋食堂」というレストランをオープンする。これは、開戦一色となった世の中に平和主義者としての反戦をつきつけ、「万民が共に囲む食卓」によって自由平等、迷信の破壊、家庭の改良をはかる思惑だった。しかし、口うるさいマナー指導のせいで、客はなかなか増えず、すぐに開店休業となる。同じ頃、町内の浄泉寺の住職・高萩懸命は、檀家である「新平民」と呼ばれ差別される被差別門徒の為に、現状を打破しようと孤軍奮闘していた。

世間の無理解な差別や、自分自身の葛藤に苦しむ悩む懸命であったが、製材所の差別問題をきっかけに誠之助と共闘するようになり、次第に社会主義に感化される。正義を叫べば叫ぶほど、町内で孤立する彼ら、しかし次第に多くの青年同志が集うようになる。

誠之助らは、若者の成田誠四郎を中心に改革派の新聞、「牟婁タイムズ」支局「ラヂカル社」を立ち上げる。そしてその言論活動によって、置娼問題に抗議するなど、社会への異議申し立てを行っていった。その中には、神崎シゲの姿もあった。

明治四十一年、東京では赤旗事件が起こる。被疑者となった同志の裁判の為、幸徳が上京の途中に新宮に滞在する。浄泉寺では幸徳を囲む座談会が開かれ、幸徳のダイレクタ・アクシヨンの演説に触発された青年たちは、石炭運搬船のストライキを起こし、一時的に成功へと導く。革命への希求と、悲壮な現実によって、ラヂカル社の面々の理想も乖離を始める。又、絶対的貧困になすすべもなくなった懸命は、誠之助と袂を分かち、「南無阿弥陀仏」による救いへと戻って行く。

やがて政府の思想弾圧の強化と共に、平民社は孤立無援となり、大星の抱える理想と矛盾が、若者達にとっては次第に受け入れがたいものとなっていく。

その後、平民社に現れた職工の一青年が投げた革命の直球は、それに関わる全ての人々を大波の嵐に巻き込んでいく。